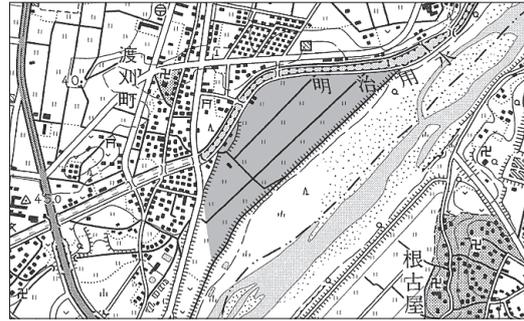


みずいり
水入遺跡

所在地 豊田市渡刈町字下糟目及び大屋敷
調査理由 第二東海自動車道豊田東 I C 建設
調査期間 平成 11 年 4 月～平成 12 年 3 月
調査面積 56,250 m²
担当者 佐藤公保・花井 伸・中野良法・酒井俊彦・池本正明・川井啓介・小嶋廣也・
竹内 睦・鈴木 裕・鈴木達也・洲崎和宏・成瀬友宏・皆見秀久・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

調査の経過 水入遺跡は豊田市渡刈町字下糟目・大屋敷地内に所在する。「水入」はこの地の通称であり、古来より頻繁に水害を被っていたことを窺わせる。発掘調査は第二東海自動車道の豊田東インター建設に伴う事前調査であり、平成 10 年 10 月から継続して行っている。今年度の調査は 56,250 m²に及び、A～L までの 12 調査区を設定し調査を実施している。

立地と環境 遠く長野に源を發した矢作川は山間を経て一端、豊田市の中心である拳母盆地に至り、その後、台地を侵食し沖積平野に流れ出る。水入遺跡は矢作川が台地から平野に注ごうとする矢作川右岸の標高 23 m の埋没段丘上に立地する。周辺には遺跡が多く立地しており、周知の遺跡として北には縄文土器の散布地として大明神 A 遺跡・西糟目遺跡・北田遺跡（共に消失）や鳥狩塚古墳等、西には渡刈富士塚古墳がある。南に目を転じると、第二東海自動車道予定地内に天神前遺跡・郷上遺跡があり、昨年度までの調査によって前者では古墳時代・古代・中世、後者では古墳時代から近世までの遺構を検出している。東にあたる矢作川左岸では、中世の山城である細川城山城がある。（佐藤公保）

調査の概要 水入遺跡は中央部に矢作川に直交する谷地形が入り込んでおり、この谷地形より南側の低位段丘面上において A～C・L の調査区を設定、縄文時代早期および古墳時代中期から戦国時代末までの多数の遺構を確認するに至った。

A 区 A 区では、昨年度の 98 B 区で確認された古墳時代中期の開削になる大溝の延長部分を調査、新たな見解が得られた。まず、開削当初の規模は、幅約 5.5 m、深さ約 4 m の薬研状の断面形であり、低位段丘下部の拳大から人頭大の円礫からなる礫層を大きく掘り込んでいり。掘削で出た土は溝の両側に積み上げ、土塁としている。土塁は残存状態の良好なところで観察した結果、基底部約 4 m 以上、高さ 40 cm 以上の規模で、土塁盛土中には礫は含まれない。礫をどう処理したかについては不明である。また、掘削で表れた礫層に対しては、粘質の強い土で上から覆い、崩落を防ぐとともに平滑な表面に仕上げている。また、同じ土で溝下部に不規則な間隔で土橋状の構築物をつくっている。この目的については定かではない。ところで、土塁盛土下からは尾張の廻間Ⅱ式併行の高杯がコンテナ 1 箱分出土している。現在のところ大溝内からはそのような古墳時代前期にまで遡りうる土器の出土はみられないが、大溝開削時期を考えるうえで看過できない資料であろう。

古墳時代中期の大溝堆積層は大きく 2 層に分けられ、下層は、昨年度 98 C 区で矢作川に面する崖下から大量に土師器が出土した層に対応している。須恵器を含まず、高杯・小型丸底壺で構成され、概ね 5 世紀中葉とみられる。この層は植物質を多く含み、木製品を多数出土した。木製品は、鋤・機織具・木錘などの農工具類のほか、特徴的なものとして高床建物に関わるとみられる梯子・板状建築部材、祭祀具である刀形木製品がある。また、剣

形石製模造品・白玉・管玉が出土しており、当該期における祭祀場の可能性がより強くなった。上層からは、下層に後続する土師器群に初期段階の須恵器が多数混じった状態で出土した。ほとんどが大溝と矢作川に囲まれた空間から投棄された状態である。土師器は高杯が多くを占め、杯部が碗形のものである。また、須恵器は概ね5世紀後半とみられ、蓋杯・無蓋高杯・大型甕があり、特に大型甕の存在は注目される（第4図）。

その後7世紀中葉から8世紀初頭の堆積、8世紀末から9世紀代の堆積、13世紀代の堆積がある。大溝が大きく改作されるのは戦国時代から江戸時代初頭にかけてのことで、溝上半部の幅を約10mにまで広げる大規模な工事をおこなっている。

矢作川に面する崖は98C区の南端で若干内側へカーブし、99A区でもその一部が確認され、5世紀代の土器が多く出土した。

大溝と矢作川に面する崖の間の段丘面上では幾時期もの遺構が重複して確認された。古墳時代中期には大溝脇で4間×2間の総柱建物がある。7世紀代は竪穴住居10数棟からなる集落がある。この時期の竪穴住居は一辺約5mの隅丸方形で、真北に主軸をとらずに大溝と平行に主軸をとっている。また大溝より西側の空間にも確認されている。造りつけの竈が確認されたものもある。この集落は8世紀に入ると姿を消してしまう。そして8世紀末になって復興する。ただしこの時期には掘立柱建物中心の集落となっている。この時期に属する特徴的な遺物として瓦塔が出土している。13世紀代には谷地形から北側同様土坑墓群が形成される。形状は円形、副葬品は灰釉系陶器碗が中心だが、長方形のものが1基あり、そこからは銅製和鏡が出土している。関連遺物として五輪塔の各部が挙げられる。さらに戦国時代には屋敷地が形成され、溝区画内に井戸を有している。井戸は段丘下部の礫層上面まで掘り込まれ、素掘りの状態で構造物は確認されていない。

B 区 B区では大溝の他、5世紀代と考えられる一辺約7mの竪穴住居が確認され、矢作川に直交する戦国時代以降の構築になるとみられる堤状遺構が確認されている。堤状遺構は大溝東側の土塁に直角に接合している。

C 区 C区は、谷地形の南端の一部が確認された。大溝は谷地形に接続するが、接続地点は既に破壊されており、その具体相は不明である。大溝からはA区と同様に土師器と木製品が出土する層、その上に須恵器を含む土器群の層があり、須恵器は甕・把手付碗が含まれ、有孔円盤形石製模造品2点と白玉約40点が出土している。

段丘面上では古墳時代から戦国時代までの土坑・ピットがほとんどであるが、調査区東端付近で壁面が焼けて赤化した長軸30～50cmの不整形な土坑が約20基確認された。時期不明の土器片が若干出土している。覆土中の炭化物を炭素年代測定にかけたところ、約9,000年前という年代得られた。従って縄文時代草創期から早期にかけてのものということになる。

L 区 L区では遺跡中央の谷地形を確認するにとどまった。 (永井邦仁)

D 区 99D区は、昨年度調査された98D区の南西側に隣接し、範囲確認調査において入江状の小規模な谷地形の存在が想定された地区にあたる。

98D区では、古代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の土坑墓、戦国時代の方形区画溝と掘立柱建物が確認されている。99D区は、98D区に連続する位置にあるため、98D区で検

出された遺構と同様の遺構が確認されている。つまり、古代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の土坑墓、戦国時代の方形区画溝が検出された。また、新たに縄文時代の竪穴住居と最終埋没期が江戸時代と考えられる谷状の落ち込みも確認された。この落ち込みは、範囲確認調査において想定された入江状の小規模な谷地形と認められ、調査区の南西側約 1/3 の範囲に展開し、さらに南西方向に広がる様相を示している。湧水と崩落と軟弱地盤によって完掘することができなかったが、調査区南西端で最も深く、落ち込み面から約 3 m を測り、さらに南西方向に深さを増す状況がうかがえる。

次に 99 D 区の概要を時代ごとに記していく。

縄文時代の遺構は、竪穴住居が 4 軒と土坑が数基検出された。これらの遺構の多くは、谷状の落ち込みから 20 m の範囲に限られている。4 軒確認された竪穴住居のうち 1 軒は、一辺約 4 m を測る隅丸方形プランをしており、中央に方形の炉が重なり合う状態で 2 基確認された。また、住居内の南端付近にある土坑からは縄文土器が立位で検出されている。土器の遺存状態はあまり良好ではないが、出土位置と検出状況から埋甕の可能性が考えられる。この住居の床面付近から加曾利 E-2 式期並行と考えられる土器が出土しており、この竪穴住居の時期は縄文時代中期と想定できる。他の 3 軒は、いずれも直径約 4 m の円形プランをしているが、そのうち石組みの炉が検出されたものもある。時期に関しては、土器が小片のため確定できない。出土遺物は、土器以外に石鏃や磨製石斧・石匙・石錘などがある。

古代の遺構は、竪穴住居が 30 軒以上、1 間×2 間の掘立柱建物が 2 棟、東西方向にのびている幅 50 cm、深さ 70 cm の溝が 1 条、土坑が多数検出された。竪穴住居は、一辺 5 m 前後のものが多く、竈を有するものも 8 軒認められ、ほとんどが北側に位置している。竈の中には、被熱部分が灰色を呈しているほど高熱を受けたものが集中する区域が確認されている。この竈の平面形態には円形と方形がある。高被熱の土を持ち帰り、フローテーションを行なったところ、多量の骨片が検出された。以上の状況から、高被熱のものは、煮炊き用の竈以外の施設とも考えられる。出土遺物から竪穴住居の時期は、7～8 世紀が想定される。

中世の遺構はわずかしか認められなかったが、そのほとんどが直径 70 cm～1 m、深さ 20 cm 程の円形プランをした土坑である。遺物は少量出土しているのみであるが、昨年度の成果から土坑墓と考えられる。

戦国時代の遺構は、98 D 区で確認された幅 2 m、深さ 1 m を測り、箱型の断面を呈する区画溝の南角部分が検出された。溝内から長石釉を施した瀬戸・美濃産の皿が出土しており、概ねその時代の遺構と想定できる。(中野良法)

E・F 区 E・F 区は、遺跡の北西部にあたり、遺跡が立地する段丘より高い段丘に移行する位置にある。E 区の全体及び F 区の南西部は、水入遺跡がのる低位段丘面上にあり、平坦な地形である。F 区の北東部は、上位の段丘面あるいは低位段丘面の一段高い部分に相当し、平坦であるが、F 区の中央は、南西から北東にむけて上る緩傾斜地となっている。E 区南端は、矢作川から北西にのびる谷地形（谷 A）の北東辺にあたり、ここから北に浅い支谷（谷 B）が延びて E 区の中央部を横断する。F 区の南端にはこれに平行する浅い支谷（谷 C）が谷 A からのびる。

検出された遺構遺物は、I 期：奈良時代 II 期：中世～近世の 2 時期がある。I 期の遺

構としては、E区の99D区に接する部分で竪穴住居2軒を検出した。これより洪積台地側にはこの時期の遺構はなく、集落の西限と考えられる。Ⅱ期については、中世の方形土地区画が確認された。谷A・B・Cは、中世の段階ではほとんど埋没して周囲より低い窪地状になっていたものと推定される。この窪地によってコの字状に区画された幅約30m長さ約50の方形の部分に谷Bと谷Cを結んで谷Aに平行する溝を2ヶ所巡らせ、方形の土地区画が2区画形成されている。この区画内には掘立柱建物の柱穴が集中し、屋敷地になるものと考えられる。同時期の井戸は、谷の比較的浅い部分に検出され、谷Bで5基、谷Cで9基が検出された。また、近世の集落は確認されなかったが、同時期の井戸は谷Aと谷Bで近接した位置に各1基を検出した。これらの井戸は、すべて構造物は遺存していなかった。その他、E区で縄文時代晩期後葉の条痕文系と削痕文系の土器の組み合わせる土器棺墓1基を検出した。

H 区 H区は、調査区北西部が後世の削平を受けていたこともあり全体に遺構は希薄であった。遺構の展開の中心は調査区中央から南部に広がっており、主な遺構として古代の竪穴住居1棟、中世の土坑墓にきられる掘立柱建物1棟、中世の土坑墓7基を検出した。このうち掘立柱建物は、2間×3間の総柱の建物で柱穴の底に黄褐色の土を入れつきかためてあった。これらの遺構の分布状況から、水入遺跡における古代の居住域と中世の墓域はともにH区の南部あたりが北限になると考えられる。この地区での主な出土遺物としては、調査区の中央を北西から南東にかけて走る溝から鉄族が1本出土しており、また中世の土坑墓からは灰釉系陶器碗が出土している。この他の主な出土遺物として遺構の検出段階を中心にナイフ形石器1点、スクレイパー1点、礫器2点を含むチップ・フレイクなど旧石器時代に属すると考えられる遺物数十点が出土しており、この付近に旧石器時代から人々が生活していたと考えられる。(成瀬友弘)

G 区 G区は昨年度調査された98D区北東に位置しており、検出状況は98D区に類似したものとなっている。検出された遺構は奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代の3時期に大別することができる。奈良・平安時代の遺構としては、98D区側、すなわち調査区南西部を中心に15軒の竪穴住居が展開している。竪穴住居の規模は一辺4～5m程度で、隅丸方形のプランを呈している。北壁又は西壁にカマドが残存しているものも見られた。また、SB19の竪穴住居の床面からは被熱したと思われる土坑が確認された。熱残留磁気測定の結果、竪穴住居に伴う遺構であることが判明したが、性格は不明である。これ以外に、掘立柱建物7棟を検出した。

鎌倉時代の遺構としては、まず土坑墓をあげることができる。土坑墓は約70基確認され、少数の隅丸長方形のもの以外は、円形のプランを呈する。とりわけ調査区南端部に位置する土坑墓において、遺構の中心部に灰釉系陶器(碗・皿)とともに白磁の合子が、調査区東部の土坑墓からは灰釉系陶器(碗・皿)とともに古瀬戸前期の四耳壺が出土している。また、この時代に属する遺構として竪穴状遺構3基を検出した。うち1基の竪穴状遺構は床面が2度構築されており、作り直しが行われた可能性が高い。この遺構の性格については検討を要するが、遺構内部から礫とともに土坑墓と同時期と考えられる灰釉系陶器が出土しており、土坑墓との関連性がうかがわれる。上記以外の遺構として、掘立柱建物、溝、土坑などがある。

江戸時代には耕作地が展開されたと想定される。それに付随する遺構として、畦畔及び

2基の常滑窯産の埋め甕を検出した。

(川井啓介・皆見秀久)

J 区 上面

J 区は、水入遺跡の東端に位置し、すべての調査区のなかで最も矢作川と明治用水が接近する地点にある。表土を除去した際に、ベースとして考えた面が、湧水が著しい黄褐色粘質土のエリアと比較的乾いた暗褐色粘質シルトのエリアに識別されたため、その境界線の画定と下部の堆積状況の調査のために、水抜きも兼ねて、調査区中央部に合計5本のトレンチを設定した。

J 区上面は、およそ幅 1.5～3 m・深さ 50 cmの溝を境として、遺構の在り方に相違がみられ、このことについて、溝の北側が黄褐色粘質土のエリア、南側が暗褐色粘質シルトのエリアに大別されることとの関連が着目される。ただし、溝については、灰釉陶器・椀1点のみしか出土していないため時期や性格については不明な点が多い。他の遺構については、まず、北側であるが、床面が被熱している土坑3基と、縄文時代のものと思われる袋状土坑以外には、主だった遺構は検出されなかった。床面が被熱している土坑はおよそ長軸 2.5～3 m・短軸 1 m・深さ 20 cmほど、袋状土坑はおよそ長短軸 50 cm・深さ 60 cmであるがベース面から 20 cmほど下がったところで長短軸が 60 cmほどに広がるものである。次に、南側であるが、比較的、遺構が密であり、土坑群やピット群のほかにも数条の溝が検出された。しかし、これらの遺構は、遺物を伴っていないものがほとんどであったため、時期や性格については推測することができないものが多かったが、なかには、中世墓と思われる隅丸方形土坑もあった。これは、およそ長軸 2 m・短軸 1 m・深さ 50 cmであり、数点の灰釉陶器・椀が出土したもので、この辺りが昨年度調査区 98 D 区から続く墓域の北限である可能性を示唆するものである。

(鈴木達也)

J 区 下面

上面での遺構検出の段階から、フレークなどが確認され、水抜き用に設定したトレンチより、縦長剥片から作成された石刃が出土した。そのため、下面の調査を行うことになった。トレンチ断面の土層を見てみると J 区の基本層位としては、黄褐色粘質土層の下に灰白色粘質土層・礫層が確認された。火山灰分析の結果から、始良 Tn テフラ (AT) が検出され、灰白色粘質土層にそのピークが見られることが確認されている。それにより、AT 降灰期の下位に灰白色粘質土層・礫層が河川の運搬に伴って自然に堆積し、AT 降灰期頃にこの辺りが陸地化して風成堆積物の供給が多くなって、黄褐色粘質土層を累積させた埋没段丘上に調査区が位置していることが明かとなった。

下面の調査は、調査区全体ではなく石器類が集中して出土した北東部を対象に行った。5 m グリッドを 4 分割して、千鳥方式で掘り下げを行った。まず黄褐色粘質土を掘り下げ、石器類が出土したところはさらに掘り下げ範囲を拡大した。続いて、灰白色粘質土を掘り下げた。掘り下げの段階で礫を多く検出したが、明確に礫群や配石と認識できるような遺構を検出することはできなかった。遺物の石材としては、頁岩やチャートが大半である。コア・フレーク・チップがほとんどで、ナイフ形石器やスクレイパーなどの製品は数点に留まっている。出土した石器類は、全部で 330 点を越えている。このような石器類の出土は J 区が中心ではあるが、他の調査区でも確認されている。

なお、本遺跡の周辺の旧石器時代の遺跡としては、矢作川に沿った北側に大明神 B 遺跡があり、川の対岸の岡崎市には千地遺跡や仁木八幡宮遺跡などが知られている。(小嶋廣也)

ま と め 以上2カ年の調査の結果を時代別にまとめておこう。

水入遺跡の始まりは後期旧石器時代にまで遡る。遺跡北端付近の窪地を中心に石器作りの痕跡が確認された。付近の石材のみならず黒曜石や頁岩・土岐石といった遠隔地から入手したのがあり、旧石器時代人の活動範囲に関する基礎資料として注目される。

縄文時代は草創期から早期・中期の遺構・遺物が、晩期の遺物が確認された。草創期から早期の焼土坑は谷地形より南側の段丘端部に集中し、中期の住居は谷地形の北側の段丘端部に展開しており、水場を意識した立地である。なお、中期住居内埋甕は県内では貴重な例である。

古墳時代中期の遺構は谷地形より南側に限られる。大溝を開削したものの、大型のものを含む竪穴住居数棟しかなく、一般の集落というより、祭祀場を含む特殊な空間として整備したと考えられる。そのような場で初期段階の須恵器が多数出土したことは注目すべきであろう。また、当遺跡の立地が加茂郡と碧海郡の境にあることも重要である。

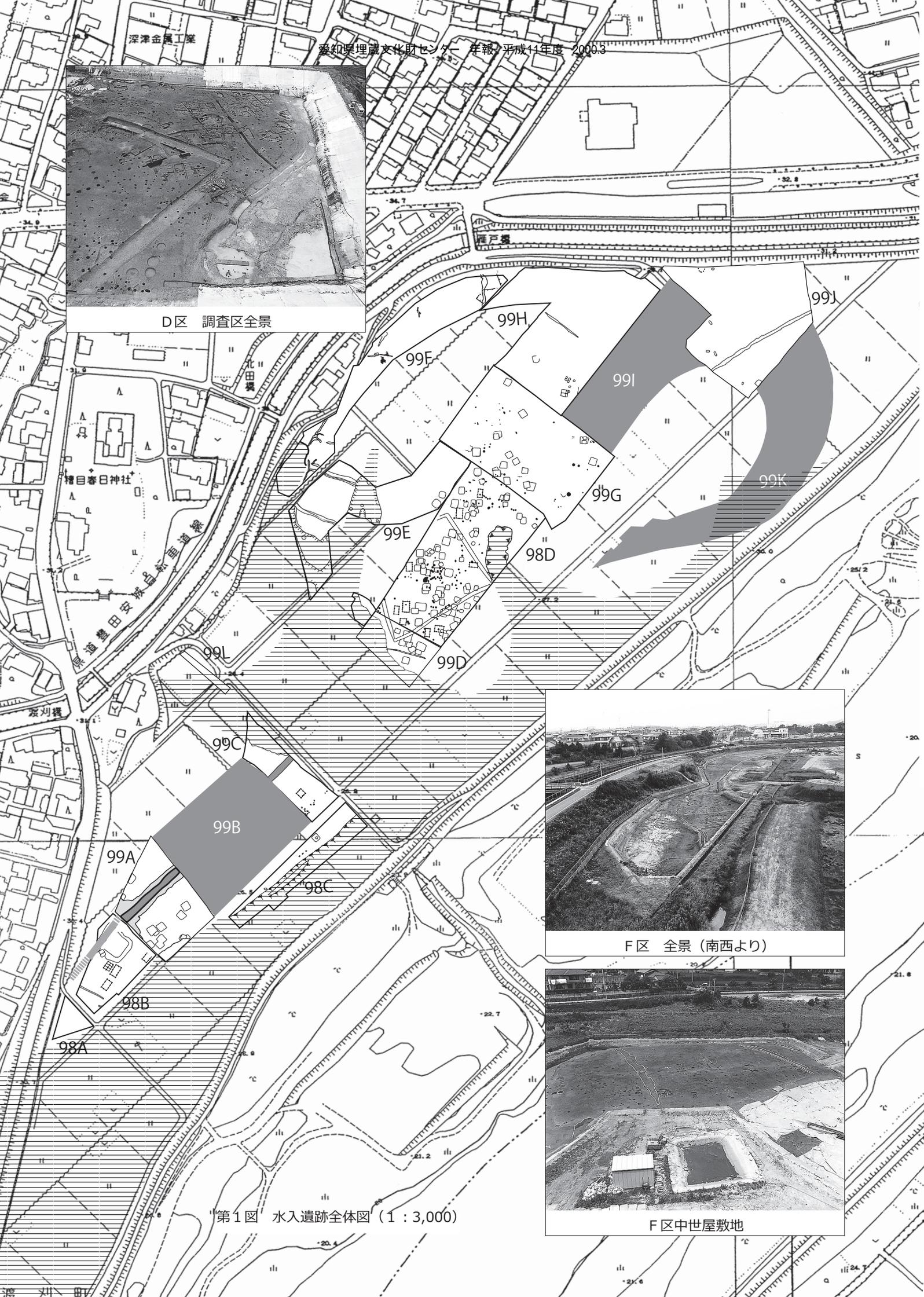
古代の集落は7世紀中葉に谷地形南側に展開し、8世紀になって北側の段丘面の奥へと進出している。この時から住居の方位が真北を意識するようになる。しかし住居が竪穴から掘立柱へと推移するのは8世紀中葉以降となるであろう。そして、9世紀には谷地形の南側にて、瓦塔・仏鉢形須恵器を用いた仏教信仰が展開する。

鎌倉時代には、遺跡のかなりの部分が墓地になっていた。方形の土坑墓は100基以上ある円形の土坑墓にはない副葬品を有し、階層差がうかがえる。また、この地が墓地に選ばれた条件として、郡境という立地が大きな要素であったことと想像される。

戦国時代は谷地形南側・段丘奥部を中心に屋敷地が展開し、堤状遺構もこれに伴って構築されたのであろう。また、鎌倉時代の墓地跡に方形の区画溝が掘削される。しかしそれも江戸時代初めには終わり、耕作地へと姿を変えていく。 (永井邦仁)



D区 調査区全景

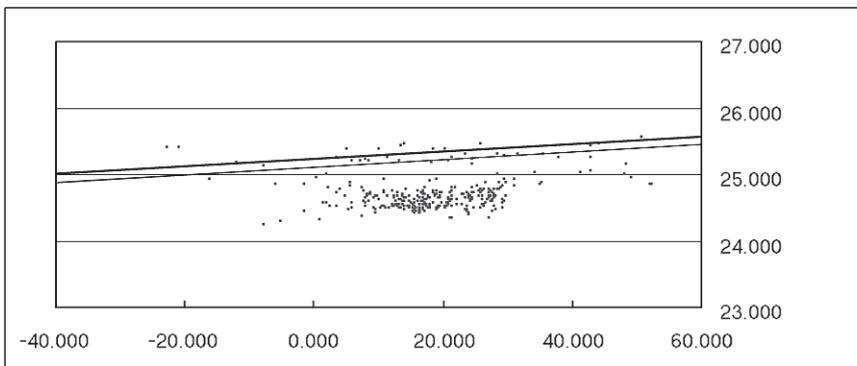
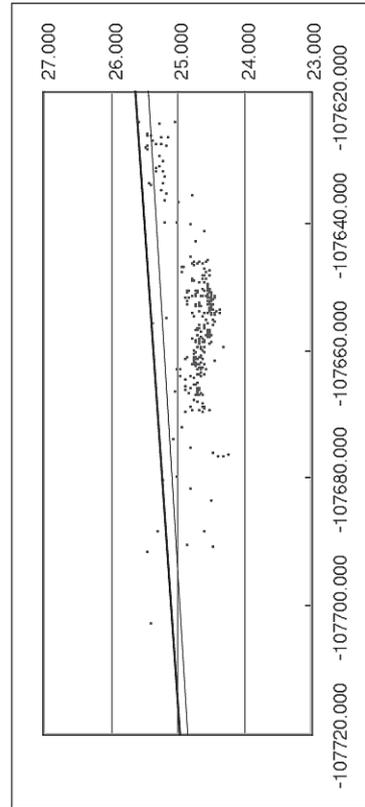
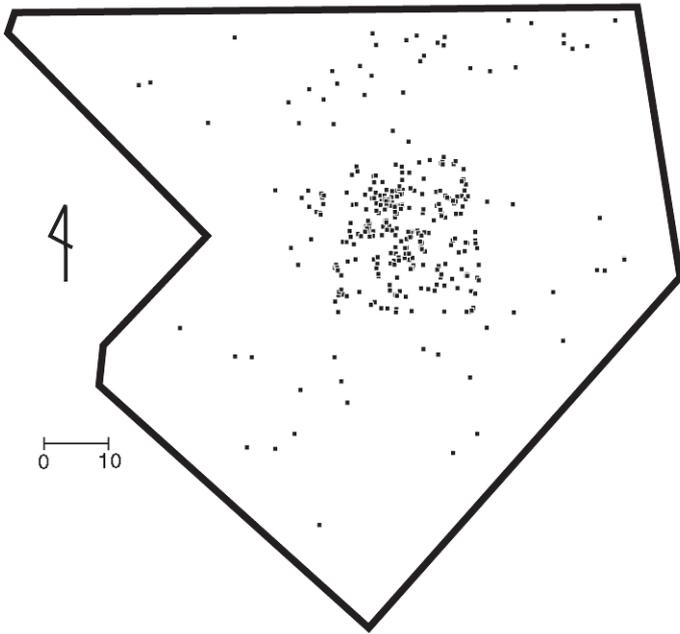


F区 全景 (南西より)

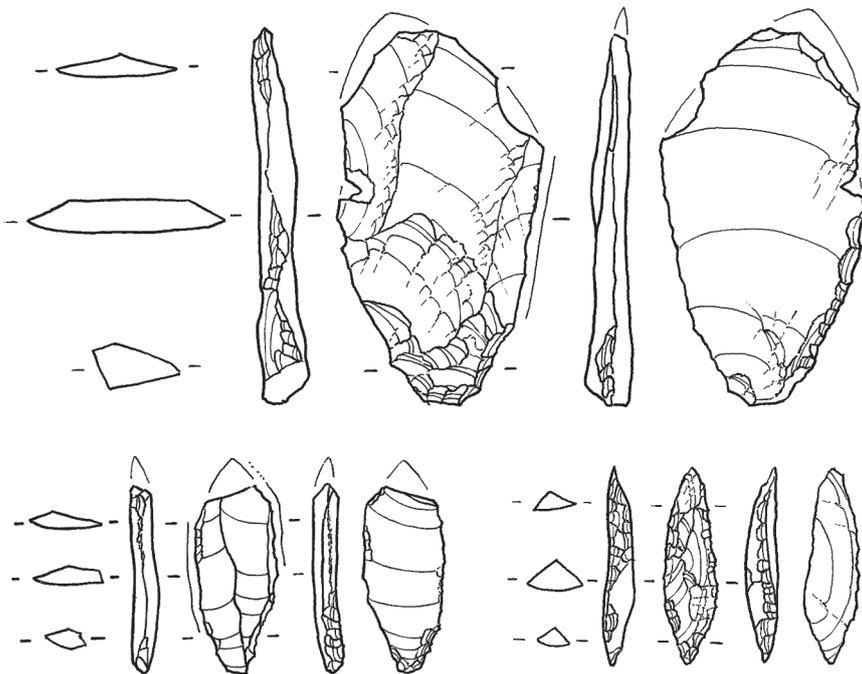


F区中世屋敷地

第1図 水入遺跡全体図 (1 : 3,000)



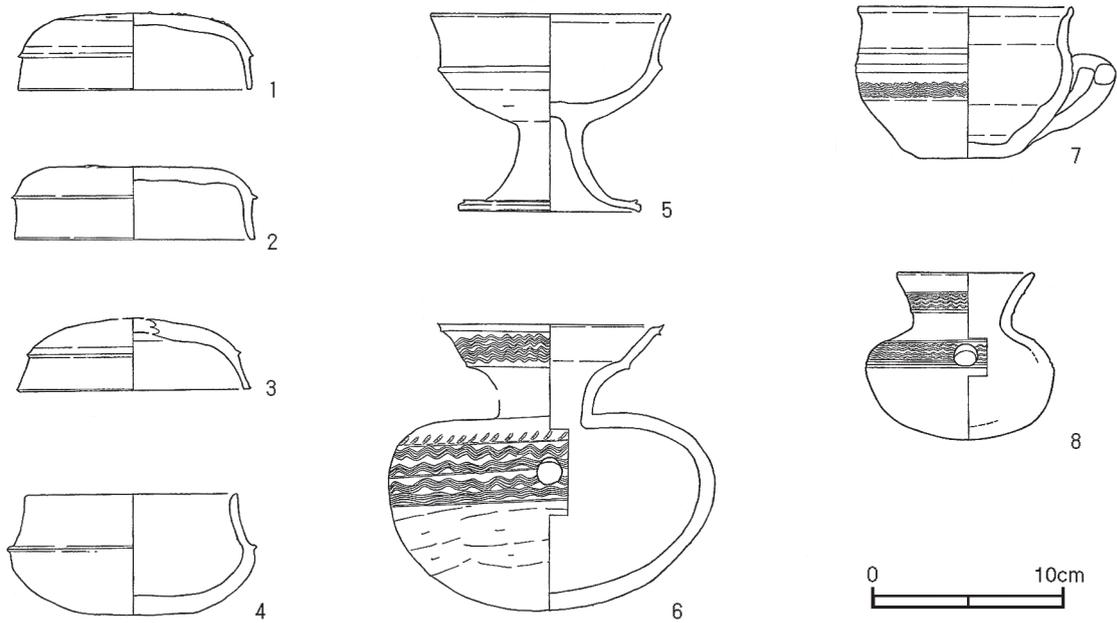
第2図 J区下面石器類分布図



第3図 旧石器遺物実測図 (1:1) (斎藤基生氏による実測・トレース)



J区 下面調査作業風景



第4図 大溝出土の古墳時代須恵器（1：4・1～6はA区、7・8はC区）



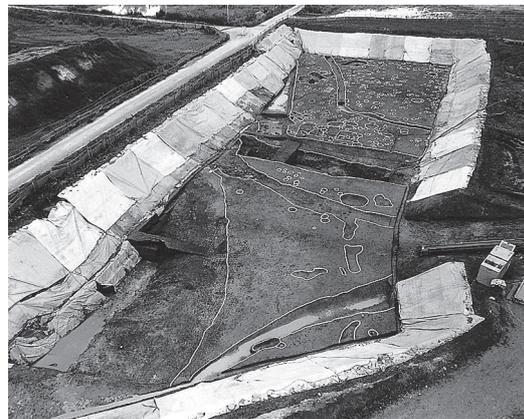
A区 大溝東側全景（西より）



A区 大溝西側全景（南西より）



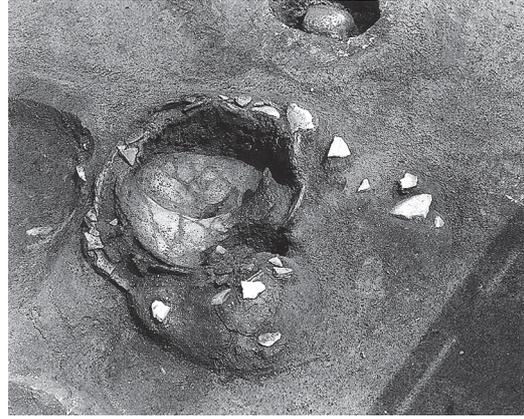
大溝土器群出土状況



C区 全景（西より）



D区 縄文時代の竪穴住居



E区 縄文時代晩期土器棺墓



H区 竪穴住居



H区 掘立柱建物・中世土坑墓



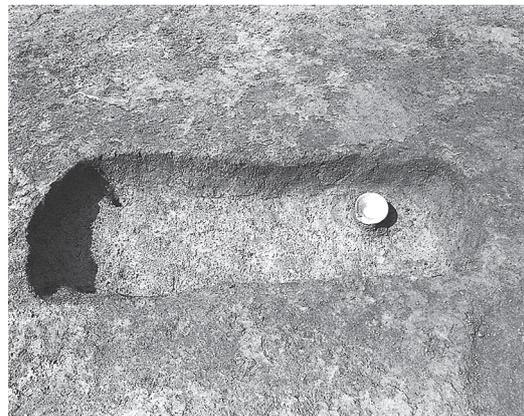
G区 竪穴住居



J区 SD 24 完掘状況



G区 合子出土土坑墓



F区 中世土坑墓